

“二足のわらじ”人生

学校誌「渦の音」第68号に掲載

鹿兒島大学名誉教授 (医学部・病理学) 米澤傑 (昭和43年生)

すぐる

私の「医学」と「音楽」の“二足のわらじ”人生でのハイライトは以下ようになります。

「医学」では、日本病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」受賞。「高松宮妃癌研究基金学術賞」受賞。各種がんマーカー等の論文の著者世界ランキング第6位(日本人第1位)にランクイン。



「トゥーランドット」の舞台

「音楽」では、日本クラシック音楽コンクール声楽部門第1位、ならびに、全部門でのグランプリ獲得、太陽コンコルト・カンツォーネ・イタリアーナ優勝。オペラ「トゥーランドット」の主演・カラフ王子。鹿兒島県芸術文化奨励賞受賞。ヨーロッパで録音したCD「誰も寝てはならぬ/米澤傑テノール・オペラアリア集(G.ステファノ指揮・ソフィア国立歌劇場管弦楽団)」のヒットチャートでの度々の第1位。

「医学」のこと

この「渦の音」は、卒業生もお読みになり、医学にご興味のお有りの方もいらっしゃると思いますので、ごく簡単に、私の「医学」関連について述べます。「病理学」とは・・・簡単に申し上げますと、「身体から採取された顕微鏡標本で、“がん”が“がんでないか”の最終診断を行っている医学分野で、“がん”をはじめとする様々な病気がどのようにして発生するかという研究も行っています。

私は、2010年4月28日、東京で開催された第99回日本病理学会総会において、宿題報告講演「ムチン:ヒト癌における臨床病理学的意義と遺伝子発現機構の解明から腫瘍悪性度早期診断システムの構築まで」を行い、高い評価を得ることができ、病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」を受賞し、その内容を、その年の年末には「Mucins in human neoplasms: Clinical pathology, gene expression and diagnostic application」という20頁にわたる英文論文として出版でき、私の30年間にわたる「ムチン研究」に関するライフワークをまとめることができました。「宿題報告」とは、日本病理学会独自のシステムで、病理学の研究面で著明な業績を挙げている研究者の中から、宿題報告講演担当者が選ばれ、1年半前に正式に発表され、1年半かけて、さらに、研究を進展させてまとめた講演を行い、講演後には、その研究内容を英文総説論文として発表するようにとの「宿題」が課される訳です。私の研究内容につきましてご興味のお有りの方は、ホームページ「傑作の会」のURL: http://kessaku-no-kai.com/の「スグル先生の聴診器」のコーナーの米澤の病理学的研究で、そのまめがご覧いただけますし、宿題報告講演の様子は、「記事/対談/談話」のコーナーの2012年8月-鹿兒島市医報第51巻8号の前半に掲載されています。なお、4月28日の宿題報告講演後、すぐに、東京から京都に移動し、翌日4月29日には、京都都会館開館50周年記念「第九演奏会」(指揮:井上道義・京都市交響楽団)で、テノールのソリストを務めるという綱渡りをいたしました。まさに、“二足のわらじ”人生の典型例といえます。

幼少期から中学生まで

私が生まれたのは、鳴門市撫養町林崎という鳴門市中心部からは外れた路地裏でした。祖父母、両親、弟と私の三世代が一つ屋根の下に暮らし、両親はともに学校の教師をしており、私の幼少時期は、祖母に面倒を見てもらうという完全な“お婆ちゃん”でした。

特に、これと言ったエポックメーカーなこともない幼少期期でしたが、優しくも厳しい祖母に接し続けた幼少期に、私の性格形成の基礎が築かれたといっても過言ではありません。また、よく振り返ってみますと、件数は決して多くはないのですが、私の「医学」と「音楽」の“根本”が見えてきます。基本的にはとても優しいお婆ちゃんでしたが、イタズラ等をした時には、ズボンを下ろされて、“お尻を平手打ちされるという厳しい面もありました。

まさに“一身体”で祖母と暮らした幼少期期でしたが、祖母が亡くなった小学校6年生の時には、祖母の臨終を見届けた後、思わず外に飛び出し「絶対に死なない薬をつくる!」という“誓い”を叫んだのを、今でもハッキリと覚えております。私の幼少期期の性格形成の根本であった祖母の死は、私の「医学」への道の深層心理的基礎となりました。

私の「医学」が、単に、“医療”だけではなく、“医学研究”という道へ進むのには、父の弟である私の叔父の影響があります。叔父は、高校時代までは私達と同居しており、私もとても良く可愛がってもらいました。早稲田大学理工学部に進学し、橋梁設計の勉強をして大学を卒業する頃に、その叔父が、大学院進学について、自分の兄である私の父にさかんに相談をしており、「教授が研究をさらに進めるために大学院への進学を奨めてくださっている」というようなことを

よく話しており、幼心にも“大学教授”という職業があり、敬愛する叔父が自分の将来について相談をするくらい価値の高い職業なのだと思ったものです。その後、大学教授の重要な仕事の一つが「研究」であることを知り、“研究への憧れ”になったのです。幼心の“誓い”と“研究への憧れ”が合体して、最終的に、「医学部教授」という職に就いたということになります。

幼稚園から中学校までは、山も谷もない淡々と日々を過ごしたのですが、取ってエポックを挙げれば、幼稚園の学芸会で「桃太郎」を演じたことと、中学生の時に徳島県の独唱コンクールに出場したことです。中学校の音楽の先生から、突然、徳島県の独唱コンクールに出場するように命じられ、私自身はもちろん、両親も「お前が歌うのか!?’といった状況でした。“変声期”の頃で、圧倒的に女子生徒に有利な年齢ということもあり、男子生徒は誰も入賞しませんでした。私は予選を通過できた男子生徒2名のうちの1名となり、「歌がうたえるんだ」と自覚する大きな転換点となったことは確かです。

城南高校2年生の時には「NHKのど自慢」に出場しました。その頃の「NHKのど自慢」は、現在のようなバラエティ番組ではなく、かなり「コンクール」という側面を持っており、「歌曲の部」「民謡の部」「流行歌の部」と3部に分かれて審査が行われていました。私は、徳島県大会の「歌曲の部」で優勝しました。

その後、医師になってから、プロ歌手も対象としている「日本クラシック音楽コンクール」声楽部門第1位、ならびに、全部門でのグランプリを獲得し、「太陽コンコルト・カンツォーネ・イタリアーナ」でも優勝を果たしました。

城南高校時代

私は、城南高校へ入学と同時に、バレーボール部と音楽部に入りました。ただ、バレーボール部には部員が4名しかおらず、試合に出ることも出来なかったのですが、日々、トス、アタック、回転レシーブ等の練習をして汗を流すことで満足していました。

音楽部には、歌を趣味にする人達、様々な楽器を演奏する人達の多彩な人物が、かなりの人数集まっていました。高校2年生の時に、私が部長に選任され、秋の文化祭で、ミュージカル「マイ・フェア・レディ」を上演しました。私は、「君住む街角」という美しいメロディの歌をうたうフレディ役を演じながら、総監督と演出を担いました。舞台衣装は、それぞれ個人で準備し、舞台装置も手作り、ピアノの得意な音楽部員が必要なメロディをずっと弾き続ける中、ところどころに、様々な楽器の演奏を加え、“立体感”を持たせるという工夫をいたしまして、「マイ・フェア・レディ」公演は大成功を収めました。

「マイ・フェア・レディ」とともに、私の高校時代の大きなハイライトは、「徒歩旅行」です。まずは、高校2年生の夏休みに、鳴門市から徳島市を経て、山の方に向かって吉野川添いの道をさかのぼり、四国の「へそ」とも言える池田町を経て南下し、高知市を目指すという、全行程200キロメートルを5日間で踏破するという“大旅行”です。私の親友の2人とともに、3名での大旅行に挑戦しました。1泊目は、徳島市の私の叔母の家に泊まりました。2泊目は、徳島市と池田町の中間地点である脇町の安旅館に宿泊し、3泊目は、池田町のお寺に宿泊させて頂きました。そのお寺でご馳走くださいましたカレーライスの味を今も忘れることは出来ません。4泊目は、池田町と高知市の中間地にある大豊町のコースホテルに宿泊し、5日目の夜遅くに高知市に到着しました。高知市到着の直前の小高い山から見た、街の灯りが点灯している高知市の夜景は、いまでも心に残っています。

さて、この夏の「5泊徒歩旅行」の成功に気を良くして、その年の暮れも近い冬に、後輩と2人で、高松市から鳴門市まで、間にある「讃岐山脈」を乗り越えての全行程80キロメートルを一気に踏破することを試みました。高知市への夏の「徒歩旅行」は“暑さ”で大変でしたが、この高松市からの「山脈越え縦断」は“寒さ”との戦いで、「讃岐山脈」の頂上付近に達した時には、雪が降り始め、しかも、完全に道に迷ってしまいました。日は暮れかかるし、このままでは「遭難」という二文字が頭をよぎりました。そこで、私がとった行動は、とにかく出来るだけ高い所に登って、周囲の地理をハッキリ把握しようということでした。急いで、山頂近くまで登りましたところ、眼下の樹木の間に、アスファルトで舗装された自動車道を発見でき、その方向に向かって下山をして、その自動車道に辿り着くことが出来ました。後は、ひたすら、その自動車道を歩き、夜中遅くになって、なんとか鳴門市に帰着できました。自宅に帰り着き、玄関で、リュックサック等の装備を放り出して、しばらくグッタリと横になっていました。まさに「遭難」一歩手前の危ない「山脈越え縦断」でした。

高校2年生の時の修学旅行は、各々の生徒の希望により、「東京方面の有名大学見学ツアー」と「九州方面の温泉旅行」から選択することが可能で、進学校であった城南高校の9割方の生徒は「東京方面の有名大学見学ツアー」を選びましたが、私は迷わず「九州方面の5泊6日の温泉旅行」を選びました。3日目は鹿兒島の名勝庭園「仙巖園」のすぐ隣の旅館に泊まり、翌朝は早起きをして、桜島から登る朝日を見て大変大きな印象を受けました。今でも、その光景が目には浮かび上がります。まさに、これで、私の鹿兒島大学への進学が決まった訳で、人生の大きな分岐点であったこととなります。

## 鹿児島大学時代とその後

子どもの大学受験の頃は、国立大学受験に関しては「一期校」と「二期校」といった種類分けがなされていた。「一期校」受験で京都大学医学部に合格できず、「二期校」受験を考えた場合、西日本の「二期校」で医学部があるのは、山口大学と鹿児島大学のみで、修学旅行で見た「桜島から登る朝日」により、迷わず、鹿児島大学医学部を受験し、幸運にも合格できました。

入学後、男声合唱団に入団したのですが、声量の大きな私の歌声がどうしても飛び出してしまう、指揮者から、いつも歌声のボリュームを抑えるように注意されることで、とても居心地が悪く、1年後には、合唱団には別れを告げ「独唱」に力を入れることにしました。教養時代に、私は、取得可能な単位全ての116単位を取得しましたが、それでも、時間は有り余り、空き時間には、しょっちゅう教養キャンパスのすぐ隣にある教育学部音楽科のピアノ室に行き、発声練習をしていました。

小さなピアノ室だけでなく、教育学部音楽科で最も大きくグランドピアノのある教授室で練習をしていましたところ、クラリネットの先生が走り込んで来られ、すっかり、大目玉をいただくという覚悟を決めたのですが、なんと、その先生が「貴方はとても素晴らしい声を持っているから、正式に声楽のレッスンを受けなさい」とのことで、まるで、拉致されるようにその先生の車に乗せられ、鹿児島短期大学の声楽教授のところに連れて行かれ、声楽のレッスンを受けることになりました。そのことが、私の声楽テクニクの基礎となり、だんだんと、演奏会で「独唱」を歌う機会も増え、これから述べます井上先生や松本先生との幸運な出会いもあり、一流の指揮者や歌手との共演、オペラ「トゥーランドット」への主役出演、ヒットチャートの1位を獲得するようなCDのリリースへ繋がり、世界一流の歌手ともジョイント・リサイタルをするような「音楽活動」へ発展し、ニューヨークの音楽記者が『米澤の歌った「清きアイダ」の最後の高音は、メトロポリタン歌劇場でも聴いたことのない素晴らしいものであった』と世界中に発信して下さるまでになりました。そして、2021年7月8日には、故郷・徳島の「あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）」で開催されました「米澤傑 テノール・リサイタル」で、これまでの私の集大成を歌うことが出来ました。



徳島でのリサイタル

## 音楽活動へ至る道―“出会い”と“ご縁”

「日本の演奏家・クラシック音楽の1400人」という本が出版されており、小澤征爾さんと辻井伸行さんと一緒に、「米澤傑（医学者、声楽家（テノール）鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授）」も掲載されています。その私の項の「印象に残る人物、目標とする演奏家」に、「井上道義、松本美和子一人柄の素晴らしい」と掲載されていますが、まさに、そのお二人との“出会い”と“ご縁”により、私の音楽活動の場が広がりました。

## 井上道義先生との“出会い”

井上道義先生との“出会い”は、井上先生が、1985年に開催されました鹿児島で初めての「かごしま県民第九演奏会」の指揮をなさったことに始まります。この演奏会のソリストはオーディションで選ばれました。テノールに課された「課題」は、マーチの部分のテノールソロでした。このテノールソロを歌うのは大変に難しく、音楽大学の声楽科出身の方々も沢山オーディションを受けましたが、このソロを最後まできちんと歌い通すことが出来ましたのは、私一人のみで、私がソリストに選ばれました。

演奏会本番の2ヶ月ほど前に、井上先生が鹿児島にお越しになり、オーケストラや合唱団のレッスンをなさるとともに、会場の鹿児島県文化センターで、ソリストへもレッスンをしてくださいました。レッスン途中で、私が、テノールソロを歌い始めた途端、井上先生は指揮をやめて、ピョンと舞台から飛び降り、ホールの最後部まで走って行って、腕を組んで、私のソロを聴いていらっしゃいましたが、その時は何もおっしゃいませんでした。おそらく、私の声が「そば鳴り」ではなく、「いかに遠くまで響くか」ということをお確かめになつていらしたと想像しています。翌年の春、井上先生からお電話を頂き「井上道義です。今度、NHKで“第九をうたおう”という番組をつくるので、米澤さんにテノールのソリストをお願いしたい。」とのことでしたので、喜んでお受けし、東京のNHKに何度か通い、二期会の歌手の方々と一緒にソリストを務めました。

なお、私は、1993年に、幾つかの演奏会での私の歌の録音を集めたCD「米

澤傑 テノールコンサート」（収録曲の多くのピアノを、妻の悦子が担当しています）を自費出版しています。このCDには、井上道義先生の『(1)この国に生まれなかったら、僕はホセ・カラスのはずだった。(2)神に与えられた才能とほんの少しの努力。これが本当の歌う喜び！(3)日本中のテノールよ、嫉妬しろ！ 井上道義（指揮者、テノール発掘人）』というご推薦のお言葉が掲載されています。このCDをお聴きくださいました世界最高の指揮者のロリン・マセール先生は、色紙に、「To Dr. Yonezawa, Possessor of a lovely voice and “feel” for opera. Good luck!」というお言葉をお書きくださり、サインをしてくださいました。

## 松本美和子先生との“出会い”

NHKの“第九をうたおう”が全国放送され、それをきっかけに、全国各地より「第九」のソリストのお話を頂き、ナポリ市のサン・カルロ歌劇場で開催された「第九のナポリ公演」でのテノールソリストも含め、ベートーヴェン「第九」のソリストは100回を超えます。第九アジア初演の地である私の生まれ故郷の徳島県鳴門市で、毎年、全国から合唱団員が集って開催される「鳴門の第九」の関係者の目にも留まり、たびたびテノールソリストとして招聘されました。1996年6月、私が鹿児島大学医学部の助教授であった頃ですが、鳴門の「第15回記念第九演奏会」で、国際的ソプラノ歌手の松本美和子先生と初めて共演いたしました。その演奏会の後、松本先生が「1週間後、イタリアの高名なオペラプロデューサーのジャンフランコ・パスティネ先生が東京にお越しになるから、是非、貴方の声を聴いていただきたいの!」とのことで、パスティネ先生と松本先生にオペラアリアやカンツォーネをお聴きいただきましたところ、お二人揃って、私のイタリアオペラ界へのデビューを強力にお勧めくださいました。

まず、松本先生が「私には実績があります。超一流会社にお勤めであった方を、退職させて、ミラノ・ヴェルディ国立音楽院に留学させ、バリトン歌手に育て上げました。」とおっしゃって、「貴方も歌手に転向して、イタリアデビューをすれば良いのに」と、パスティネ先生と二人で、強力にイタリアで歌うことをお勧めくださいましたが、私が医学の道を他に替える意志がないことをハッキリ申し上げましたところ、「では、オペラシーズンの1ヶ月半だけイタリアで歌い、あとは、医学部で仕事をしていから」とまでおっしゃってくださったのですが、当時、助教授であった私は「3年後に教授選があり、立候補します。医学部の教授選はかなりの難関で大変ですから・・・」と申し上げましたところ、お二人ともやっとなごうございました。

私は、小学校卒業文集の「将来の夢」に、「大学教授」とハッキリと書いており、その頃から、大学での研究生生活に憧れていましたので、お二人からの熱心なイタリアデビューのお勧めをあっさりお断りした次第です。「amazon」での通販サイトで、私のCD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑 テノール・オペラアリア集」へのコメントとして、「日本にもこんなに素晴らしいテノール歌手が出るようになったのかと驚いた。「天は二物を与えず」とは昔から言われているが、この米澤先生には天は二物を与えた。鹿児島大学医学部教授として病理学の研究を続ける傍ら日本有数のテノール歌手として我々凡人には考えられない。声も素晴らしい、歌も理知的で知性がある。若い頃から歌一本で活躍していたらと残念に思う。まさに日本のマリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授である。」とお書きくださっています。

## CD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑 テノール・オペラアリア集」に至る道

私は、CD「誰も寝てはならぬ / 米澤傑 テノール・オペラアリア集」を発行する前に、1993年にはCD「米澤傑 テノールコンサート」を、2002年には、霧島の「みやまコンセル」でのリサイタル（ピアノ：久邇之宣）と、「日本・ルーマニア国交100周年記念コンサート（指揮：尾崎晋也 / ルーマニア国立トゥルグ・ムレシュ交響楽団）」で歌いました録音を収録しましたCD「米澤傑 テノールの魅力」という自費出版の2つのCDをリリースしていました。そのうち、私の声楽活動の集大成として、フルオーケストラとの共演での「オペラアリア集」を発行したいと思うようになってきていました。

ちょうどその頃、大手レコード会社から直接お電話を頂き、「先生のお声で、これまでの通念を完全に覆すような“日本歌曲集”のCDを収録したい」というご提案を頂きました。“フルオーケストラでのオペラアリア集”で頭がいっぱいであった私は、そのご提案を即座に断ってしまいました。今、考えますと、もったいないことをごとく・・・とも思えます。なお、その時にお伺いしてみたのですが、「フルオーケストラ

でのオペラアリア集”は、大手レコード会社であっても、費用的にとっても無理である」とのことでした。

私の熱心なファンの方が、日本最高の録音技師、録音ディレクター、ならびに、録音プロデューサーにお声掛けをくださり、東京で、私の“フルオーケストラでのオペラアリア集”のCDの作成に



について相談をしましたが、暗礁に乗り上げてしまい、話が進まなくなってしまいました。そこで、思いきって、松本美和子先生のお宅に伺いご相談を申し上げましたところ、その場で、すぐにイタリアのジャンフランコ・パスティネ先生にお電話をしてくださりました。

我々ではどうしてもなかったことが、どんどんお話しが進み、数日のうちに、パスティネ先生が、イタリア人指揮者のジョヴァンニ・ディ・ステファノ氏とブルガリアのソフィア国立歌劇場管弦楽団にご依頼をしてくださり、2004年のゴールデンウィークに、ソフィアで最高の「ブルガリアホール」を借りきって録音を行うということまで決まりました。ゴールデンウィークの始まりに合わせてすぐにイタリアに飛び、指揮者のステファノ氏とピアノを使つての打ち合わせを行った後、ソフィアに入り、3時間、3時間、6時間、3時間と4日間連続で歌い続け、計15時間で15曲(1時間で1曲のペース)の収録をするという「離れ業」で録音を致しました。1時間に1曲録音ということの実際は、まず、初対面同士の指揮者とオーケストラだけで音合わせを行い、次いで「小さな声で歌ってみて」と、曲想も含めた打ち合わせと試し歌いを行い、そして、「はい、本番テイク」ということで、本番収録となり、ほぼ「一発録り」というペースで録音が行われてゆきました。オーケストラのメンバーから「あんた喉が強いネ!」というお言葉まで頂きました。松本先生とパスティネ先生もずっと収録に臨んでくださり、松本先生は、そのCDのジャケットの「このアルバムに寄せて」というライナーノーツに「四日連続でこれだけの難曲を録音できたテノール歌手はかつて誰もいません。米澤さんはこの驚くほかない離れ業を成し遂げてしまったのです。」とお書きくださっています。

以上のような収録でしたので、全ての経費を私一人で負担いたしまして、気の遠くなるほどの費用がかかりましたが、幸い、NHKの芸術劇場やラジオ深夜便をはじめ、沢山のマスコミにお取り挙げ頂き、ヒットチャートの第1位をたびたび獲得するほど良く売れましたので、CDのリリースから、かなり早い期間で、CD作成に掛かった費用を全て補填することが出来ました。日本人テノール歌手で、フルオーケストラでのオペラアリア集を発行できていますのは、プロ歌手を含めても、私一人のみであるという「希少価値」も、このCDが良く売れた一因であると考えられます。

©TOWER-P・Ranking 08/07/01 7:21

TOWER RECORDS

J-Classical ウィークリーチャート

各ジャンルのウィークリーチャート

ジャンル: J-Classical

順位	アーティスト	タイトル	価格(税込)	発売中	CD	ジャケット
1	米澤傑	誰も寝てはならぬ/米澤傑	3,000	発売中	CD	0809/000
2	辻井伸行	debut / 辻井伸行	3,000	発売中	CD	0809/002
3	辻井伸行	ラママンノ・ピアノ協奏曲第3番 / 辻井伸行	3,000	発売中	CD	0809/002
4	米澤傑	米澤傑の芸術	2,800	発売中	CD	0809/001

タワーレコードのランキング

### CDのヒットチャート第1位獲得

私のCD「誰も寝てはならぬ/米澤傑 テノール・オペラアリア集」が、ヒットチャートの第1位を獲得するほど売れましたのには、高名な音楽評論家の故・黒田恭一先生のご推薦と応援が大きいことも確かです。黒田先生は、「家庭画報(第47巻第10号、2004年)」で『今、黒田さんが最も注目するオペラ人』の2名をお挙げになり、1名は「サイモン・ラトル+ベルリン・フィル」、そして、もう1名が「米澤傑」でした。その記事では、「マリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授に会おう」という題目で、黒田先生と私との対談が掲載されています。

さらに、音楽雑誌の「モーストリー・クラシック」(通巻第91号、2004年)の「巻頭言」『黒田の感動道場』に、私のCDについて「玄人/素人の壁を超えた歌唱に驚き」という記事をお書きくださり、「サライ」のような一般雑誌へも紹介記事を書き、そして、なんと、「BURRN!」という「ヘビメタ」の雑誌にまで「オペラを見事にきかせるテノール、しかしその正体はうたうお医者さん・・・!？」という紹介記事をお書きくださりました。CDの帯には「天から授かった珠玉の喉を磨きに磨いて、その声を本物のテノールのものにした米澤傑。一級のテノールをきいたときだけに味わえる至福の瞬間! (音楽評論家 黒田恭一)」というご推薦のお言葉を、ジャケットのライナーノーツには「聴け!これがテノールだ!」というタイトルで「テノールのうたいあげる情熱がいかに純粹で、ひたむきで、熱いかを実感したかったら、米澤傑の声と歌唱に真摯に耳を澄ますに限る。まさにこれがテノールである。」とお書きくださっています。

高名な音楽プロデューサーの中野雄先生も、音楽雑誌の「モーストリー・クラシック」(通巻第162号、2010年)に、『上杉春雄(ピアニスト)と米澤傑(テノール) 一天は二物を与える? 医学と音楽の二足のわらじ』という記事で、札幌の神経内科医でピアニストの上杉先生と、鹿児島病棟でテノールの私を、「日本の医学界には、「東の上杉、西の米澤」と並び称される、2人の

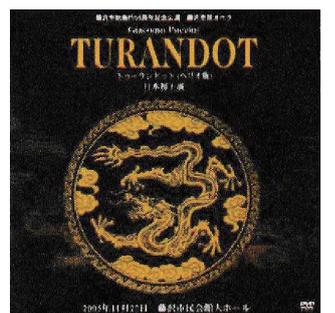
鬼才が活躍している。」とご紹介くださっています。さらに、その「続編」として、「モーストリー・クラシック」(通巻第188号、2013年)に、『再認識しよう一瞬は決して疲れない 天が二物を与えた上杉春雄と米澤傑の後日談』という記事で、美智子皇后陛下御臨席のもとサントリーホールで開催された「モーツァルト・レクイエム」での私のソリストの模様などを、私の専門の「病理学」での活動と共に書きくださっています。そして、2021年9月に発行されました「モーストリー・クラシック」(通巻第294号、2021年)に『天は二物を与える・再論 医師・テノール歌手 米澤傑の現在』という記事で、私の「医学研究」について、この上なく判りやすく、かつ正確にお書きくださり、私の「音楽への道」につきましても、「声楽との出会い」から、名指揮者の方々と共演や「トゥーランドット」に至るまでを随分的にお述べくださり、イタリアデビューをしていたら「本場で活躍する稀有な邦人テノール」が誕生していたかも知れないが、「米澤は医学部教授への道を選択、日本の医学界は貴重な人材を失わなくて済んだ。」とおまとめくださっています。

2019年12月には、新しいCD「米澤傑 テノールライブ~オペラアリア・カンツォーネからミュージカル・映画音楽まで~」をリリースいたしました。ライブ録音ですので、私の「一発勝負の歌」というスリルとともに、コンサート会場での臨場感(新型コロナウイルス感染症拡大の前に録音されていますので、一曲ごとに、客席からの「ブラボーや歓声の嵐」をお聴きいただけます)を味わっていただけます。中野雄先生は、このCDの帯に「誰も聴いたことのない歌声! 世紀のテノール米澤傑 白熱のライブ(音楽プロデューサー 中野雄)」というご推薦のお言葉をくださいました。

### オペラ「トゥーランドット」への出演

2005年イタリアでは、ジャンフランコ・パスティネ先生のご推薦により、サンタマルガリータの夏の音楽祭での野外劇場で、日本では、神奈川県藤沢市民会館で、オペラ「トゥーランドット」の主演・カラフ王子を演じました。藤沢の「トゥーランドット」では、舞台装置だけで8,000万円、総額は億単位の費用がかかったとのことで、全幕の収録がDVDとして販売されています。

日本でのオペラ「トゥーランドット」(ベリオ版・日本初演)の公演は、2005年の11月の藤沢市民会館でしたが、総監督・畑中良輔、指揮・若杉弘、演出・栗山昌良、という当時の日本最高の布陣で、私以外の歌手は、全て、二期会のトップスターの方々でした。その「トゥーランドット」公演の2年前に、突然、畑中良輔先生からお電話をいただき、「2年間あげるから、「トゥーランドット」のカラフ王子役の勉強をして、藤沢市民オペラで、カラフ王子役を歌い演じなさい。」とご下命を受けました。早速、ピアノ譜でも厚さが3cmはある「トゥーランドット」全曲の楽譜とCDを購入し、鞆には、楽譜とCDを入れておき、通勤時、電車やバスに乗っている時間などには、いつも楽譜を眺めながらCDを聴いて、とにかく歌詞とメロディを覚えるという作業に入りました。ピアニストでもある妻にもピアノを弾きながら歌ってもらい、まさに「口移し」でメロディを覚えてもらう、ということもしょっちゅうでした。本番の4ヶ月前くらいからは、演出家のもとの「舞台稽古」が始まり、月曜日から金曜日までは、医学部教授としての仕事をし、土曜日一番便で藤沢へ行き、1泊2日で「舞台稽古」に参加し、日曜日の最終便で鹿児島島に帰り、また、教授職の仕事を行うという「二重生活」が続きました。いま思い返しても、まさに「ゾット」するような4ヶ月間でした。しかし、本番で、見事に、カラフ王子役を歌い演じきり、幾度にもわたる「ブラボーの嵐」のカーテンコールの後、幕が降りた舞台上で、演出の栗山昌良先生から「これで、ひとりのテノールスターの誕生だな!」とおっしゃっていただきました。まさに「長い〜苦しい〜瞬間の喜び」の典型例で、その瞬間があるからこそ、長く苦しい練習にも耐えられるのです。



「トゥーランドット」の舞台